

可認物便郵釐三第省信遞日六十二月二十年一十三治明  
行發日五十日二回二月每 行發日一月二十年五十三治明



# 政 教 時 報

號二十九第

論說

四

二社

貳

▲ 神教の精神

本多辰次郎

○労働者と住家問題 ○教界の二大醜事  
○學制改革案 ○工場法案と工業協會  
○獨逸新教徒同盟會 ○英國に於ける羅馬分離運動  
○羅馬教主ミエヌイット ○宗教改革祭と學校 ○梅方過激

革祭之學校 ◎ 梅

死と獨身生活  
無限の罪惡

百目木智輝

講究問題 家住

佛弟子小傳

## 求道と傳道

〔佛教徒と基督教徒〕

▲道に対する熱情  
道に對する一片炎々たる熱情、求むるときは、求道の精神である。傳ふるときは傳道の活動である。固と身命を忘れて、求めたる道なれば、亦身命を忘れて傳へねばならぬ。自分が暗黒の裡に彷徨して、人生の曠野に迷ひたる経験のあるものは、他人が同一の苦痛に陥りつゝあるをみて坐視して居らるべき筈はない、されど又如何に他人に大道を指示せむと勉むるも、自己か之を求めて發見したものでなければ嚮導者たる資格はない、今日の道を求むるもの、道を傳ふるもの皆眞面目でない信仰を求むるものか研究的態度を以て之れを弄べば、之を傳ふる者も徒らに聲を大にして實感なき言語を列べて居る、何れも浮薄なる根據なき行動である。毫も眞摯なる爲めに、碧天の冷凜と過ぎ沙河日を遮る間を涉り、贊真和尚此法を傳ふる爲めに老軀幾度か蒼海の濤に漂ひしも毫も避易しなかつた、古人が此法を求め、此道を傳ふるが爲めに幾多

政 教 時 報

## 大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし、國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査する事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して、善良なる家庭を作らしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極の方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を駁絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其惑化を暫く世界に光被せしむる策を講ずる事。

▲牢固たる確信  
夫故傳道につきて最も肝腎なる要素が確信である。近時佛教界に傳道的精神の欠乏せるは、たしかに確信なきに原因する、確信なるものは我信する所は我一已にあらず、佛陀夫自身である、我言ふ所は一點の私なし、佛夫自身の御言葉を傳へるのである。自分一個人としては妙たる微賤のものである、されど心中に宿れる佛陀の御心は何人に對しても傳へずには居られぬ廣大なるものである、即ち此信仰の外に純粹なる信仰はなく、此宗教の外に真正なる宗教なしと考ふるに至る次第である。是頗る狹隘固陋の如き看あるも、信仰の性質としてかくあるべきである。此確信がなければ傳道出來る筈はない、全体寛容は佛教の美德であるリストダビッ氏の如きは頻りに之を嘆美して居る、されど寛容と云ふは先づ第一着に自己の確信が成立してあつて、他の信仰が之と異りて居つても、之を迫害せずに、漸次正しさ信仰に來るべく寛大に導

くことである。爾るに寛容なる美名の下に殆むど信仰もなければ、本領もなきに陥るものがある。甚だしきに至りては基督教の神は佛教の佛であるなど、放言して憚らないものがある、殆むど寛容か、退讓か、了解に苦しむ次第である。現にモニエル、ウヰルヤム氏の如きは印度學者で佛教を惡しまに云ふ人であるが、佛教の寛容の點を論じて、佛教は他の信仰と兩立せざる教(An Exclusive system)たることを要求せず、他の宗教の地を占むことを狙はず、却て如何なるものを寛容す、佛教は同時にヒンズ教たり、孔子教たり、老子教たりの事をも得、最も驚くべきは基督教たることを得と云ふて居るが、佛教の眞義を知らぬ言なれど、無定見なる佛教徒には頂門の一針として冷静に聞くべきの言である、ハルナック氏が日本には佛教と基督教との融和を謀らむとする運動ありとの事なるが果して事實にやと尋ねられて私かに心耻かしく思ふた事であつた、全体吾人は歐米の宗教を觀察して、其經營の行届きて居る點は頗る余師とするに足ると考へ、他山の石として、之を紹介することを怠らない、されど宗教自身として、信仰の真髓として、佛教は遙かに基督教の上に出づることは争ふべからざる事である。此點に於ては西洋に早く佛教の入らざりしを遺憾に思ふ次第である、況んや吾同朋にして、佛教を捨て、基督教に入る人あるを見ては同情の念に堪へるものがある、基督教を信する人ならば何れも宗教的性質が第一の原因である。若し此確信あらば片時も黙して居るべき筈がない。

質を有して居る人である、若し此人にして佛教を早く聞くの機會を得たりしならむには、必ずや佛陀の攝取中に入りしらむにと切々の情止むべからざるあることが多い、吾人は断言す、佛教に於て現時傳道の盛ならざるは、牢固たる確信な

ス、コレッジに於て養成することなるが其科目から、其教授の摸様等を見るに、決して學者を作ることを主とせずして、宗教家たるべき品性と其實行に適切なる知識藝術を教ふることをして居る、其他曲橋牛津の大學神學科の様子にせよ、獨逸など、比較すれば舊臭ひ所はあるも、確かな所がある、又現に牛津大學卒業生中に於て外國傳道に從事するものゝ會が出來て居る、英國教會中に於ける傳道を見るに内地傳道と外國傳道の二者に分かれて、教區傳道、教會軍等て各種の慈善事業を初めとして移住者、陸海軍等の傳道到らざるなく、各所の英領及び外國へ出かけて居る、佛國の舊教とさては、一見竦然として身の毛が立つ程凄じい所がある、全体不寛容が舊教の根本主義であるが、其代りには火の如き熱心を以て命懸け、遣つて居る全体佛蘭西人が感情一方の狂熱の人種であるから最も適切な所がある、巴里の市中に三十餘種の教師修道院と六十餘種の尼の修道院があるが、各其組合の主義に従ふて、教育事業に從事するあり、慈惠事業に從事するあり、說教に從事するあり外國傳道に從事するあり而して何れも清淨の行をなし、貧に安んじ、從順を主として、一身を神に捧げて、信仰を養ひ、傳道を唯一の仕事として居る。殊にゼスイット修道院は其極端なるもので、宗教改革の時獨逸に於

▲歐米傳道事業の一斑  
歐米新舊諸教會の様子を觀察するに、其信仰の頑固なると、異教に對する不寛容は實に意外千萬である、其代りには其所の確乎たると其傳道に熱心なるは驚くばかりである、亞米利加は何事でも大仕掛であるだけ、外國傳道等に金錢を投することは莫大なものである、紐育及ボストン等に於ける諸派傳道會社の組織と其本部の廣大なるものは驚くばかりである、特に新大陸だけありて世界的である、又商工業が盛んであるだけ、社會的事業の方に著しく發達してある、人種も種々難多になりて居るだけ、外國人等に對して親切であるが、信仰の一間に至りては基督教以外に一步も許すものでない、英國は眞實に信仰の固き人民である、全体英國人が頑固で頗る融通の利かぬ、一見愚の如き人種である、其代りには忍耐力と自信力の強きこと此上に出づるものはなからう、英國教會を以て是こそ眞正の公教會であると主張する所など英人の性質をあらはして居る英國教會の教師はロンドン大學のキンク

て、上流政治界に切り込み、フランチエスカ修道院は、下層民間に信仰を植付けて、獨逸に於ける新教の半分を回復して、所謂反對改革を成功した次第である、爲めに國家はゼズイットを禁止した十八世紀の後半所謂啓蒙時代に至りて、獨逸の呼聲が盛んになりて新教徒は、切に其不寛容主義を打撃して居たが、十九世紀に至りて獨逸神學者が屁理窟を并べて、居る間にゼズイット主義が非常に成功して新教寛容法の名の下に年々獨逸帝國議會に於てゼズイットの禁止を解除せんと企て、居る持た棒で叩かるゝ有様である、舊教教監アンチエルが膠州灣事件を挑發して遂に國際問題と爲したるが如き、吾人は飽迄も彼が目的は手段を神聖にすると云ふ口實の下に人道に反する行動を敢てする仰而非宗教を排斥するが、空論のみで實行の伴はぬ吾國人并に宗教者は深く此に反省すべきである、北清事件に付て、日本では人道論を唱へて基督教の非人道を論じて居たけれど、歐州では似新教徒が皆我は平和を出さんが爲めに來るにあらず、劍を出さんが爲めなりとの言が事實にあらはれて來たのであると考へて居つた、夫故日本は獵場の犬となつて道を開き其儘にして置くのに基督教の宣教師は平氣で内地に入り込み益々傳道に從事して居る、予は、歐米の宗教自身は感心せぬが、其所信の確固たると其教に對する熱情とには大に恐るべき點がある。

### ▲殉教の精神

大津吉崎諸所の迫害に遭ひ鞋の紐キラリとくひ入るまで、京田舍を辛苦して猶晩年大阪の傳道にあはれく存命の中に皆々信心決定あれがしと朝夕思ひはんべり、まことに宿善まさかせとは云ひ乍ら述懐の心しばらくもやむことなしと慨嘆せられたる傳道的熱情が如何に熾んであつたかを想見すべきである、吾人は今日の求道者及び傳道者に警告する吾人は此等の古聖賢に鑑みて苟も道を求め得たるものには之に傳ふることに熱中し道を傳へむとするものは先づ確かに求め得たる信仰を持し眞摯至誠の態度を以て進退行動せぬはならぬ。

再び眞宗の教言方針  
に就て所感を述べ

本多辰次郎

過般巢鴨の眞宗大學に於て、一の紛擾を起したそ一な、尋職員不信任とかの事を、眞宗大學高輪大學何れも既に新聞紙にも顯はれた事でもあり、又眞宗大學の方は教職員の幹部も皆辭職して一段落着いた事であるから、之を論ずるも敢て公徳を破る譯もあるまい。一体紛擾を聞くと直に僕は非常

に感じたから、其際之を論じやうと思つたが、夫は當局者が虚置をするに妨碍と成つては悪いと思つて差控へた、今日は六萬十菊の憾みはあるか知らぬが、併し根本的解決を望むには今でも決して後れでは居まいから、高輪は暫く措いて巢鴨の眞大に就て一言茲に述べて見やう、

巢鴨真宗大學の紛擾も詳細には知らないが、「日本」新聞の報道に由て見ると、生徒には三ヶ條の苦情があるよ<sup>ー</sup>で、其一は主幹が不信任である、第二は教員中氣に喰はぬ人がある、其三是學校を文部省の認可の下に置き、卒業生は無試験にて中學校師範學校の教員となれる様にして貰ひ度い、是丈であるとの事、此中第一第二は實に易々たる問題である、又世間の學校騒動に有り觸れたる問題で、教職員が氣に入らねば取り替へれば夫迄の事で、朝飯前に片付くことゝ思へる、併し第三の問題は實に大問題である、考へれば考へる程大問題である、一寸考へると是は生徒の方が無理であると言ふ人が多い、其説を聞くと、一体學問を爲るには多額の學資が入用で、他の私立學校などでは漸々授業料が高くなる、貧學生は容易に學問することが出来ぬやうに成て來た、夫に真宗大學卒業後に金儲をしたいとはアンマリ虫が善過ぎるといふ、是では授業料を徵收せぬ斗りではなく、何程か學資を給與するから、他の學校とは半額で修學せられる、夫で他の學校同様も一理ある、又一説には宗教家は實に高尚なる、神聖なる天

○基督教をして此の如く虔じき傳道をなさしむるは即ち殉教の精神である。彼は宗教の爲めに血を注ぐことを何んとも思はぬ、基督教の歴史を一瞥するに拘らず自身を初めとして殉教の血潮を以て堅められた宗教である、若し迫害の爲に倒るゝ事あらば、是れ天國の來れるなり、是勝利の凱旋なりと考へて居る、其結果基督教徒は殊更に異點を標榜して他の迫害を挑發せんと試み、他の感情を害する事を平氣で行ひて得意とし、甚だしきは基督教の名義を隠蔽して、佛教信徒中より寄附金を募り、平氣で基督教の宣傳に資するなど所謂隠險なるゼズイット主義を實行することとなる、アウグスチノは基督教徒たゞざるものは狂人も同様であるゆへ之を監禁してもよい、唯基督教化すればよいと云ふて居る、實に宗教の目的に達せざるまでに既に手段に於て反宗教的行動を爲すことになる、歐洲の社會主義に對して基督教が救濟する能はざる原因は實に此に存して居る、基督教徒たるもの深く戒むべき點である、基督教が此の如く慘憺たるに反して、基督教徒は平和に過ぎ隋氣を催ふし、安眠に陥る處がある、所謂阿片的中毒にかかる弊がある、汝は汝たり、我は我たり、と云ふ趣で、自分だけ安心して居れば可也、と云ふが如き考に陥り安い是では毫も傳道的精神がない、佛教の眞面目でない古來より爲法不爲身とか、不惜生命とか、所謂一身を捧げて法の爲めに盡すのは當然のことである、傳道の爲めに他國に遊びたるとき、

國人利刀を以て我身命を害するも、我刀を以て食とすと念じ、之を味ひて寂然として死に就くと云ふが實に佛教的済度の精神である（▲本號信界參照）殊に一點怨むる色なく、惜む様子なく、死を見ること厭するが如きが其特徴である。印度に於ける摩訶提婆日本に於ける聖德太子の子山脊王の如きは實に其理想の實現である。其督教の如く殊更に殉教を目的とするにあらざるものに臨みて何の苦痛も感ぜぬのである。傳道の手段に於て宗教の目的を行ふて居る平和の宗教であるから殉教夫自身までが平和である。されど動もすれば此點に於て誤解に陥り安い、即ち平氣で死することが高尙なることである、自分は退要して我慢を張らぬのが道徳である、と全く消極的に考ふる弊がある。是は大なる誤りである。其様な冷々淡々たるものではない、是非此道を傳へるためにには如何なる苦痛に對しても平氣であると云ふ傳道の熱情が溢れたる結果である、我味ひたる佛陀の慈愛を傳へずには居らぬと云ふ同情的精神性より顯はるゝ活動である、猶適切に言へば佛陀極濟せられたる感謝の熱情を發現するに過ぎないのである。親鸞聖人が南都北嶺の謾に遭ひ、法然聖人に連坐して流滴の刑に處せられながら、幸に配所に赴きて邊鄙の群類を化するを得るは、佛教の恩致なりと喜ばれたる殉教的精神は、もとより法然聖人にすかされ参らせて念佛して地獄に落ちたりとも更に後悔すべからず候と云ふ確信に基いて居る、蓮加・上人が大谷

職しょくを以て居る、唯名利に目が着いて、中學校や師範學校の教けう師位きじよになりたいやうでは情けない、今一層高尚な氣高きこうい氣象きじょうを養はねばならぬといふ、これも亦一理ある、前當局者などは此說らしい、如何にも尤で間然する所は無いやうにある、併し此反面ほんめんには又一種の理屈りくくつの有ることをも察せねばならぬ、是等の道理や言ひ草は生徒の方でも全く知らぬてもあるまい、知て居ながら、斯る注文を呈出する所以は、當局者が深く考察すべき點こころうちではあるまいか、

何程氣分を高尚に持てと說法したとて、衣食の資にも心を  
勢するやうでは、高尚な氣分で構へて居れるものでない。一  
簾の食一瓢の飲匱巻に在りて其樂みを更めずなどいふとは、  
顏回の如き聖賢の地位に至つた者か、一種の奇人か、或は四  
國の境遇上最早仕方が無いと諦めを付けた者より外には出來  
る話でない、其他の尋常一樣の人間には望み得る事ではな  
い、古人も倉廩實ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知ると  
いひ、又凶歳の子弟には盜兒が多いとか、恒產ある者にして  
始めて恒心があるとか、色々此點は穿て論じて居る。綿密に  
統計などは取て見なくとも、決して間違の無い結論であらう、  
武士は喰はねど高楊枝などいふのも、一は武士道の教育に  
由らうが、又一には假令其日は貧乏世帯を送つて居ても、俸給  
といふ恒產があるから起た現象である、僧侶とても人間であ  
るからは、矢張名利の慾もある、賚澤もして見たい、逸樂も

小學校時代の教育を全然放棄して置いて、中學時代大學時代に至つて俄に宗教的にせやうと言たとて、夫が出来る注文で有らうか。其又宗教教育といふものが、一乘とか三乘とか、顯教とか密教とか、それ三經の實際は如何であるとか、三家の辨別は斯く～あるとか、或は比較宗教學とか、哲學とか、何程教へても詰め込んでも、學者には成らう、併し宗教家には如何か、物識りにはなれやうが、德性を涵養したり、氣品を養成したりするには、直接の方法であらうか、併し是は決して、真宗大學の教職員が力が足らないとも、行き届かないとも悪口するのではない、教育の力といふは大抵限りがあるもので、何程エライ人が懸りても、超群脱俗の聖賢や英雄を作ることの出来るものでない、教育が若しソノ目的を以て居るなら、不可能の事實を強ゆるのである。現に我國で最完備して居る帝國大學の學生が何を目的にして居るか、其卒業生がドンナ行動をするかを見れば分る、

然れば教育は到底徳性涵養などは出來ぬか、言ひ換ふれば、德育とは唯教育學上の一目的たるに止て、實際は出來べからざる事柄なるか、否々教育が徳性涵養に大效力の有ることは疑無い事實である、併し夫には時期がある、初年時代少年時代には頗る効力はあるが、背支けが成人してからは、其効力は大部分滅殺される。批評的眼力を具有する様に成た者に向て、感化力を及ぼすは至難の業である、夫で余輩の考で見る

と、全國の許す限り多くの寺院を幼稚園に代用せしめて、其間には勿論宗教を注入し、開發せしめ、小教校を多數に興して、難僧は茲に宗教的教育を施し、中學は現在の數位にて宜しかるべく、大學は寧ろ帝國大學に托することゝ、詰り今より三年前に論じた趣旨を繰返へすに過ぎない、余輩は當時無盡燈記者に二回までも冷評せられ、からかはれた。併し斯る態度で云々するは真摯なる言論とは思はれず、又其引例などは餘り御門違ひで、少し能く考へたら、自らも其誤謬を發見するに難かるまいと思て、對論はせず、徐ろに其實蹟を見て居ることにした、余輩とても強ち帝國大學で無ければならぬと主張するのでは無い、今の本山の資力では、到底大中小學及幼稚園まで整然と打揃へて建つる譯に行くまいと思うて斯る議を立てたのである、

去れど自分の説のやうにしたら十分三界の大導師斗り出來て、名利などに頓着せぬ様になるかといふに、ソ一甘くは行かない、唯此れ彼れより善しといふに留り、誠に立派な僧侶ばかり出来るといふは望めない、聖人が已に愛欲の廣海に沈没し、名利の太山に迷惑すと御説きなされたのを見ても、吾々凡人が名利の念を脱却することの出来ないのは知れて居る、依て幾分かは彼等の名利心を滿足せしめねばならぬ、今の大谷派の制度では、迹も駄目である、格式の善い寺院で見れば何程恩借ても、住職になれば高い教職が得られる、其又

して見たい、同じ艱難辛苦して勉學する位なら、卒業の曉には多くの最大なる名譽と利益とを得たい、若し何程辛苦勉勵した處で結果が名譽も利益も得られないものなら、勉強なをするは詰らない、逸樂を貪つた方が増してあると思ふまいとも限られない、夫であるから眞宗寺院の子弟でも、學資の支辨が出來る者（假令如何なる方法に由るも）は、高等學校より、帝國大學に入る者が多い、中學時代の優等生には此道を取る者が多い、眞宗大學に入る者は、學資に窮するか、高等學校に入學するが六ヶしいか、父兄や檀信徒が承知せぬかの者が多く、何も歎も十分出来るけれども、自分は帝國大學よりも、寧ろ眞宗大學の方を選んだといふ人は比較的少いやうに聞いて居る、又今日では眞宗大學在學中のの人でも、或は帝國大學選科に入らうか、早稻田大學へ轉校せやう歎と、迷つて居る人があることを聞いた、これは恐らく勉學の勞同様ければ、卒業後少しでも多く名利を收めたいといふ常情から割出した話ではあるまいか、高尚なる論者は必ず言はるゝであらう、三界の大導師がソソナ卑屈な事でどうするか、宗教々育といふ者はモツトノヽ高尚なる氣品を養成せねばならぬと、理論は左様でも實際は無理である、今の様な宗派の組織と教育の機関では無理である、論より證據、上述の如く眞宗大學を嫌つて這入らぬものが多く、又在學生が今度の様な注文を出すべきではないか、一体今之の教育制度のやうに、幼稚園時代や、

住職になるには幾百圓とか本山へ献金すれば成れる。眞宗大學生が多年蠶雪の勞を積み、月桂冠を得た積りで卒業證書を捧げて歸國する。意氣揚々人に誇らんと欲せば、隣寺の愚僧は寺格の上等なる爲に、已に己れと同等の教職を有して居る、檀徒の多い爲に、我と同じ資格を持て居る、富有である、賛澤する、御堂へ出仕しては勿論、坐敷で座ても、途中で出逢ても、常に一目を認らねばならぬ。而も己れは貧地であるが爲に、二六時中衣食に奔走せねばならぬ。何を樂みに刻苦勉勵せやうか、他宗には某の學校を卒業すれば、某教職を得、某の教職を得れば、斯々の寺院の住職たり得べく、從て名利を得ることも隨伴するの樂みあり、眞宗には全く此愉快を缺く、是れ畢竟大學生に苦情の絶ぬ根元ならん、せんらんか、然れば徃くくは寺院制度に大革新を見るの時が来るべしと思はる、併し即今ヨンナ大改革は行はれまいか、先づ手近い所から改革に着手するなら、寺格を賣却することは斷然廢止するが宜しい、夫から高等寺院の住職は高い教職を有することは宜しいから。唯これが因果を轉動せしめて、高等寺院の住職と成たから一定の高い教職を授けるといふでなく、教職は必ず學校卒業若くは驗定試験を要することとし、ソシテ一定の高い教職を有する者で無ければ決して高等寺院の住職には成らせぬこととする、若し其教職を得られ

の更迭などをして、一時を鎮撫しやうとするのは、壊れた茶碗を飯粒を以てヒツ付けんとするの類ではあるまいか、斯る滑稽的潤縫策が何程の効を奏するであらうか。余輩は無盡燈記者に冷かされて以來三年間沈黙を守て其實蹟を見て居た、是からも亦其處置と實蹟とを見て居やう。

## 社 會

本誌前號より本號に於て池山氏か住家問題講究の結果を公にせられ、社會問題研究に就て有益なる資料を與へられたるは、吾人の深く多とする所なり。

現時の我國は此問題に就て、あまり多く考慮を廻らし研究をも遂げざるものゝ如し。衣食住の三者は、吾人に取りては一日も欠くべからざる必需のものにして、三者其一を欠くも共に不可なり。世の富豪者流の如きは、宏壯なる邸宅を築きて安然として消光するを得べんも、終日營々として労働に從事する、所謂労働者にありては、粗末ながら衣食の用は辨ずるとするも、獨り其住居に至りては甚しき困難を感じるものといはざるべからず、家賃の停滯二三ヶ月に及べば非道なる家主は直に追拂を命ずることは吾人の數々實驗する所な

り。労働者もとより華麗なる邸宅を望まさるなり、たゞ僅に風雨を凌けばこれにて満足し得るなり。而も風雨すら十分に凌くこと能はざるに至りては、何物の無情漢と雖も誰か一掬の熱淚を濺がざるべキヤ。

獨身の労働者に至りては常に一定の住居なきを以て、所謂浪人生活をなし遂に不良の群に身を投し去るは自然の數免るべからざる也。社會風俗上將た道德上より之れを論するも、住家問題は、實に重大なる關聯を來すものと云はざるべからず。

翻りて之を他の多くの家族を有する労働者に見るに、家族の係累多き丈それ丈困窮の狀態益々必迫を告げ、口を糊するに急にして住居の如き矮少、狹隘、不潔等を顧みるに遑なく、只比較的家賃の低廉なるを欲するのみ。東京の共同裏長屋の如き労働者住居の好模範なり、足一たび是等の入口に到らむが、臭氣紛々として鼻を撲ち來り吾人をして思はず嘔吐を催さしむるもの、これ實に労働者が終日の業務に疲れ安らかに眠る所にあらずや。それ労働者に貴ぶ所は健康にあり、健康は彼等にとりては唯一の武器なり、これなくしては彼等の生命は持続する能はざる也。彼等不幸にして一たび身を病床に横へんか、忽ち妻は飢に泣き、兒は寒を叫ぶ悲惨なる境遇を描き遂に一家分裂の不幸を見るに至らむ。然るに彼等は不潔にして狭隘なる住居にありながら、左程健康を損せざるは

ねば假令其寺で生れやうが、住職は許さぬ、併し最下の教職を有する者なら、副住職とし、其他は勿論何も許さぬ、併し今制度のやうに副住職のみにて、住職の事務を掌らしめ、又は有名無實の兼任を置いて、其實際の事務は非教師が取扱て平氣で居るといふては、一向役に立たぬ、寺院には必ず、若し止むを得ずんば、高等寺院には必ず住職を要すること、し、副住職ばかりや、或は全然教職を有せざる無資格輩のみの高等寺院にはほどしく資格あるものを住職に特命すべし學校卒業生の爲に夫丈けの報酬を計るべきである、而して是で自然宗内の革新も出来る。一体學校は其卒業生に位置を與ふるが最急務なれば眞宗の教育を盛ならしめんと思は、是位の事は断行すべきである、時勢は日夜に進歩すれば、何時迄も封建時代の形式ばかり株守は出來ぬことは知れ切て居る故、今の間に所行すべきである。夫さへ出來ねば、寧ろ今の大學生の注文を稱へてやるか、併しこれは下の下策なものと外思はれない、但しは又無策で今の儘に押付け置いて、徐に時節の到来するのを待つか、

之を要するに、余輩の考案では二つの改革が必要である、眞宗の教育を盛ならしむるには、否眞宗其物をして生面を開かしむるには、此二の改革を必須とする。即教育上壯年者よりも寧ろ幼少時代に注意すること、今一は真正に勉學の勞に酬ゆる制を立つること、この施設を爲さずして、徒らに職員

實に不思議なりと云ふべし。されども一朝忌まはしき疫病流行しコレラ病の如きベスト病の如き、激烈なる惡魔は容赦もなく最初に襲來するものは先づ彼等の裏屋長なり、不潔なる彼等の住居なり、彼等は債鬼と戰ふの外亦之が住ひより来る病魔と戰はざるべからず、慎むべきは彼等勞働者なる哉。東京市内に於ける彼等の住居を視察したる人は現に吾人に語りて曰く、六疊敷一室に三人の夫婦一組となりて飲食を共にし、起臥を同うするもの甚だ少なからずと。嗚呼社會改良家よ、如斯境遇にあるもの如何にして道徳を守るべきか、衛生に注意するを得べきか。要するに住居問題は一個の勞働者關係に過ぎざるが如しと雖、道德衛生に及す社會上の影響は廣くして且つ大なりと云はざるべからず、宗教家も社會改良家も共に住家問題に就ては、注意を拂ふべき一個重要な問題として、吾人は茲に諸君の前に提出して措かんとす。詳細なる點は池山氏の調査したる事項を參看せよ。吾人はたゞ此欄に於て再論したるに過ぎざる也。

## 教界の二大醜事

一は前號報道一束に收めたる東洋宗教大會にして、一は云々迄もなく覺王殿建築問題是れ。前者は實に日本佛教體面を汚辱するの甚しきもの、事情に暗き印度人はうかと山師の口に乘りて莫大の金錢を寄附したりと云ふ。氣の毒なるはげに印度人なり。後者に至りては吾人再三警告し置たるにも拘は

らず、益々醜態を露し來りて其陋殆んど見るに不堪なり。裁判沙汰も起れば、賄賂の噂もあり、而して地は今尙紛々として選定せられざるにあらずや。吾人は之を稱して卅五年終末に於ける教界の二大醜事となすもの也。吾人敢て言を好むものらむや。亦止むを得ざればなり。

## 學制改革案

高等教育會議は去る二十四日より文部省に於て開議中なが、文部省の諮詢案は凡て十個條にして、其重なるものは所謂學制改革案なり。即ち中學校に補修科を置き、高等學校を廢して帝國大學豫備門と改稱し。醫學、文學、理科等に關して高等教育を授くる學校を稱して専門學校となし。其他の工業、農業、商業等に關しては實業專門學校と總稱し、且つ修業年限に關しても多少の改革を施したり。會議の結果如何に成りゆくべきかは知らざれども、其重なる學制改革案に就ては、世論の趨向は大抵反對の意を表するものゝ如し。高等學校を改めて大學豫備門と稱し修業年間を二ヶ年とするが如きは、全く無意義の改革なりと云ふべし。文相の此改革案は文部省が二十萬圓の節減命令を受けたる結果にして畢竟苦しまぎれの改革案なりとの噂甚だ高し。帝國大學の教授高橋博士の如きは、其講堂に於て案の不法不備を罵り文相の無能を鳴したる事もありと云ふ。文相が開會の當日案の大体に就て説明せられたるが、今其の一節を左に抄記すべし。題旨は誠に

可なれども案其物の不備不法なる點は更に當局の熟考を望まずべからず。

今日の所では種々特權の種々名譽が大學卒業生のみに付いて居るから皆大學へ集まる併ながら今日事業を執るに於て必要なことは必ずしも大學程の高い教育を受けないでも十分間に合ふ中學校卒業してより三年乃至四年位の學科を卒へた者で以て十分にいける所の職業と云ふものが澤山ある又國の需用から言つてもさう云ふことは段々あるのみならず多くの大學に向ふ者も詰り一つの獨立なる職業を取れるものになることを希望するのでありますから此方に向つて學校を澤山設けこれに向つて相當の特權名譽等を與へなれば此方に向ふものが多くなるであろうさう云ふ學校を立てゝさう云ふ方に入を向はしむるの國家今日の急務であらう云ふ所から詰り專門學校の中にも主として實業專門學校多く増設したいと云ふ希望であります是が爲めに大學增設と云ふやうな事は今日どうも國家の經濟の許さぬことでござりますから是れは先づ止める又止めを得ぬ場合に於ては入學者に多少の減少はあつても宜しいと云ふ考へであります

## 海外事情

◎獨逸新教徒同盟大會　去る八月中、マンハイム市に於ける獨逸加特力教徒大會の形況は既報の通りであるが（第八十九號參看）。今度は、先月六日から數日に亘つて、加特力教徒の侵權に對して、新教徒の權利を擁護するを目的とする「新教徒同盟會」の第十五大會がハーレン市に開かれた。例に依つて種々報告やら演説やらがあつて、頗る盛んにやつた様であるが、左に第三日目の公會に於て、決議した、重なる箇條を抄錄して見やう。

一、大會は、獨逸各邦新教々會の間に、從來より一層緊密なる關聯の成立せんとする機運の到來せるを見て（第八十四號參看）歡喜の意を表し、本年五月三十一日『アイゼナハ新教々會々議』に於て撰任せられたる「獨逸各邦新教々會聯絡事件準備委員」の勢に因り、獨逸各邦新教々會の共通の利益及び任務を保護し獎勵するに就て、有効健全なる制度の案定せられんことを望む。

二、大會は、ブロイセン政府が、獨逸國風を保持せんが爲めに、ボーレン洲に於て斷行したる處置（宗教々育を獨逸語にて授くる件、第九十號參看）に就て欣然賛成の意を表す。吾人は、該洲の民が益々加特力教師の惡影響に遠ざかり、愈

にニズイットが諸種のオルデンの中最も、迫害を蒙りつゝあるは余の甚だ遺憾とする所で、舊教國たる西班牙、佛蘭西、伊太利に於て、また獨逸に於てニズイットに對し試みらるゝ妨礙は獨り信仰と教會に對する服従の力によりてのみ排除するを得べきものと思ふ云々、

(3) 宗教改革祭と學校 千五百十七年十月三十一日は、ルートルがウイツテンベルヒの教會の門に、九十五箇條の改革趣意書を貼付した日である。而して、獨逸新教は毎年十月三十一日を以て宗教改革紀念祭日と定め、學校でも之を執行することとなつて居るが、從來其の仕方が區々であつたので、此度プロイセンの教務大臣は各小學校に向つて、新教の生徒には、當日の宗教々育の時間に於て、宗教改革の意義を信仰上より説き聞かせ若し校内に於て、禮拜を行ふ時は、讚美歌及び聖書の章節の選擇に付ても、意を用ひて宗教改革に縁あるものを採り、且つ祈禱の文句中にも紀念祭日のことを言明すべき旨の達を出した。

(4) 梅毒防遇會 今度獨逸で見出しの如き會が出來て、先月十九日柏林市會議事堂で其の發會式を行つた。

其時ドクトルアラシュケといふ人が梅毒の蔓延といふ題で演説した其の中に、フロイセンで千九百年の四月三十日に調査した所に依ると同國で同病に掛つて居るものは六万一千三百五十五人あつて、患者の數は大都市に於て最も多く、田舎は

死之獨身生活

少い、男女の患者は男三人に付き女一人の比例ださうで、職業別にして見ると、學生は百人に付二十五人、商人は百人に付十六人、労働者は百人に付き九人、兵卒は百人に付き四人の割ださうで、三十歳以上で結婚するもの五人の内、一人は患者である。この弊を軽減せんには結婚期を早くするのが一番良い方法であるが、我國の事情は开をして益々遅からしむる趨向あるは遺憾である云々といふことがあつた。

死とは何ぞや、人間の命數が盡きて、身體各種の機關が活動の力を失ひ、生れぬ先きの状態に復歸するものである。かく事もなげに説き過ぐれば、何のこともないが、さて人間は凡ての事柄に於て智力から割出された道理上の説明ばかりで満足の出来るものではない、理性は十分に肯諾しても、常に其の裏を沿ふて走る感情といふものがあつて、いつかな理性の判断に同意を表せぬのである。死とは何ぞや、これ理性上の問題であるが、死は悲しむべきものかは既に感情上の問題である、死とは何ぞやの問題は直ちに解決が出来やう、死は悲しむべきものかの問題に至ては容易に決着がつかぬので

々其國民的思想の鞏固とならんことを希望すると同時に、該地に於て迫害されつゝある同信者（新教徒）の保護に盡瘁するは、獨逸新教徒の最重要なる共同義務なることを、會員並に全國の信徒に警告す。

三、頃日、加特力主義の新紙は、從來の規定に反して、苟も交通及び公安を害する恐なき限りは、加特力の祭儀行列を執行するに當り、公道及び廣場に、神壇を設置するを許す旨の秘密省令を公にしたり。抑もこの祭儀行列なるものは、元來加特力教會の所謂邪教徒（新教徒）に對する示威的觀物たるに外ならざれば、該省令が更に宗派間の反對を強め、其の平和を害する結果を生ずるや明なり。大會は遺憾ながら該省令を以て、新教徒の感情を顧慮せずして、加特力教會の不當の要求を容れたるものと認めざるを得ず、諸有法律上の手段に訴へて該省令の廢止を圖るは新教的信仰に忠なる所以なり。

四、獨逸より墺國に派遣せる新教々師にして、其職務上の一行動に對し種々妨害を受け、中には國外に放逐せらるゝものあるを見て、『新教徒同盟會』は墺國に於ける新教運動（羅馬分離運動別項參看）を保護するにつけ、政治的目的を遂行するものなりと誣ゆるものあり。大會は之に對して抗議せざるを得ず、吾人は墺國に於ける同信者と一体なるを感じ、同國に於ける信教自由の原則が完全無碍に適用され、就中、新教徒は教務の爲め、管轄官廳の認可を得て、外國人殊に獨逸人

を招致する權能を有すとの規定の實行せらるゝに至るべきを信ぜんとす。

(2) 埃國に於ける羅馬分離運動即、加特力敎徒を改宗せしめんとする新敎運動の驍將、牧師ブロインリヒの言ふ所に依ると、最近四年間に於ける改宗者は三万余人で、本年上半季に於て、新敎に轉じた者は、二千五百二十三人、舊派加特力敎(羅馬敎主の權力を認めざるもの)に轉じたるもの六百人で、現下着々侵撃の歩武を進めつゝあるといふことである、他年反對宗教改革で「ニズイットオルデン」の馬蹄に蹂躪された地方に於て、近時新敎徒が捲土重來の勢を示して來たのは大に異とすべしで、將來如何になりゆくべきか、刮目して看るべき現象である。

ある、世人の多くは死といふことに冷淡である、否知て冷淡なるのではなく寧ろ氣が付かぬのである、偶々氣が付くことがあるも、殊更に心機を轉じて想を他に移してしまう、平時死の話をすれば所謂縁喜が悪いとて鶴龜々などと操り返へす輩さへある、一家育族の周圍に縛を結ふて死神を除けようとするらしい、不幸なる哉死の神は常住不斷に吾人につき纏ふて、あれば直に其の機に乗せんとしつゝある、誠に淺薄な考ではないか、

されど死を恐れて之を遠げんとするこの迷信は、やがて宗教の門戸に入る徑路である、死といふことに氣が付て殊更に心機を轉ずるといふは其の態度の上から見れば益々宗教といふやうなことには遠ざかる様であるが、其の心性作用の上から見るとときは其の心既に宗教的である、死を思ふことを厭ふ所以は陰氣になるとか、憂鬱に沈むとか、心細くなるとか、氣持が悪くなるとかいふのであらう、さすれば彼等は死を思ふと共に心中に苦悶を起すことわかる。此の苦悶は即ち宗教心の萌芽である、他日に起る可き宗教的幾多の疑問は其の萌芽を此苦悶に發するのである、又之を他の方面から考ふるに如何に死を厭ひ嫌ふ人にも、近親や親友の死んだ當座は其の態度が幾分か宗教的となり、左まで深いところには至らざるも、多少死といふとを解決して見たい様な心が起るもの

死の場合とに於ける反對なる二方面の何れを取りて解決すべきかは考ふべき問題であると思ふ、之と均しく更に死の場合に於ける最も大切な一事項がある、而かも此の最も大切な一事項は、人間一生を縱貫する人生の最重要項目から來るものである、それは何であるか、即ち雙棲生活と、獨身生活との死の場合に於ける状態である、雙棲生活の死の場合に於ける状態と、獨身生活の死の場合に於ける状態とは大に異りがなくてはならぬ、普通の状態に在ては人間は雙棲生活を爲すべきものであつて、獨身生活を爲すは特殊の事情の爲めに餘儀なくせらるゝ結果に出づる様になつて居る、勿論男女兩性現在一般人の考ふるが如き無意味のものではなからう、殊に死に臨む場合の如きに至ては獨身生活は雙棲生活に比して勝るとも劣ることなき状態を有するであらう、かくいわゞ人或は言はん、若し汝の言ふ如く獨身生活を守らば人生に於ける最も味ある家庭の快樂といふことを知ることが出來なからうと、然り獨身生活に於ては家庭の快樂を味ふことは出来ぬ、その家庭の快樂を味ふことが出來ぬところが、即ち死に臨む場合に於ける獨身生活の光明である、抑々妻子眷屬相団欒して和氣藹然たる家庭を形造り、温かき愛情の間に一代を経歷したる雙棲生活の人人が、愈々其死に瀕するの時相顧みて

である、之を要するに人間は如何に宗教嫌びの人でも、如何に死を縁喜惡るしといふ輩でも、たとひ、自らは知らざるにもせよ、死に就ての疑問は胸底深く伏在するものたることは疑はぬのである、

そこで吾人は何事をしても、結極は死といふ問題に逢着せねばならぬ、活動とか力行とかいふとは息ある内の所作で、其の活動とか力行とかの終極は即ち死である、世界人類の活動方面は頗る多く、人々各々、夫れ／＼の活動があるが、其の終極は死といふ同一運命に歸するのである、人間の起した事業は必ずしも人と共に亡びるものではない、併し其れは人の起した事業が殘るので、事業を殘した其人の意識は死と共に滅亡するのである、子孫の繁榮、必ずしも一人一代の爲し能はざるところではない、去りながら其の繁榮は子孫の享受するものであつて、其人の死後には何等意識上の關係がない、之を要するに人間は死を以て終局とするものである、死は最後の決勝點である、然らば死に就て別に疑ふべき餘地を存せぬでないか、然り、理性は之を認諾しやう、感情が不満足をつぶやくを允許して、之に於て死の研究の必要が起る、これ畢竟人間として研究すべき第一の科目であろう、

我輩は前々號に於て「死の實際的研究」と題して渡世の狀態と死の場合とに於て少しく文字を列ねたが、死といふことに疑問を生じ、精神の安慰を求むるためには、彼の渡世の状態と

果して何の感があらう、我が死後、我が妻は如何にせん、我が子は如何にせん、我が家は如何にせん、此の子幸にして出来榮え良きも他日悪友に誘はれて邪道の人とはならざるか、彼の子素行治まらず知己親戚常に疎んず彼の将来は如何に成り行くべきか、萬感交々湧き心緒亂れて絲の如くはならざるか、凡そ人間の心を亂し心を苦しむる事、家族の關係より甚だしきはない、此の場合心を素さずして泰然死に就くもの若干あらうぞ、之に反して生涯單獨の生活を爲し妻なく子なく、家庭の温情を知らざるものは、瀕死の場合に至るも、心を牽く妻なく思を残す子なく、晴々朗々として死に行くことが出來やうと思ふ、勿論彼の温き介抱の手は今や死に行く病人比して此れは冷き夜具の袖は今際に逼る病人に與ふる一服の清涼劑まるゝ冷き夜具の袖は今際に逼る病人に與ふる一服の清涼劑にはあらざるか、

試に人の一生中について考へ見よ、妻子ある者思いきつた事業を爲すもの少く、妻子なき者に之ある者多きを見ても自から此間の消息が解せらるゝであらう、且つ人は自己の事よりは先づ妻子眷屬の身の上を憂ふるを常とする陰鬱物を憂へ己を忘れて妻子の將來に心を懼すは、病に罹りしものが屢々經驗するところである、有田憂田、有宅憂宅、財寶あれ

に此疑問解決の時にあり。思ふに宗教の力に頼らんとするもの、之を遠きに求むべからず、救の聲は近く吾足下にあり、吾身にあり、吾身を内顧して自己の弱きを感じ、吾身は現にこれ罪惡生死の凡夫なりと自覺したる時、始めて宗教の關門を打ち超へて、佛陀無限の慈悲の懷に抱かるゝを得む。

去れどわれは我慢の我なり、憍慢の我なり、いかて自己の弱きを感じ、日々夜々吾は無限の罪惡を侵しつゝあることを知るを得むや。われは吾身一切の事を棚に上けて他人の頼みもせぬ事を詮索し、揣摩勘測を逞うし自己の邪心を以て他を忖度し、猥りに人を侮り傷け、善き事までも悪しがまに言ひ觸らし、自ら偽善を以て誇る吾は洵に淺ましきもの也。然れども一だひ他人の惡事醜行を責むる時にあたり、煩悶苦痛の念自己的胸中を攪亂して、自ら惡事醜行を行ひしよりも良心の苛責堪えかたく、死に瀕するの思ひをなすことあり。思へば世の宗教家は先づ我身を正うして、而して後罪に懲める世の人をは救ざるべからず。射をよくするものを見るに必ず先づ我身を正うす、而して發して中らざるなし、百發百中殆ど意の欲する所に從ふ、宗教家も亦射に就て學ぶ所なかるべからず。

私は思ふ、今の裁判官なるもの人の罪惡の行爲を審査してよし自ら手を下して姦したことなきも、心窓に之を行ひし將に宣告を下さんとする時、自己の内心に顧みて果して苦痛を感することなきや、胸裡果して一點の疚しき所はなきか、

ことなきや、たとへ人を殺したことなしとするも、心窃に之を望みしことなきや、たしかに詐僞を働きたることなきも曾て親しき友をうりしことはなきや。法網に觸れざるもののみ罪惡にはあらざるなり、法文上の罪惡には限りあれども、吾等の妄念より湧き出つる罪惡は滾々として盡きざる也。此無限の罪惡はたゞ佛陀矜哀の法網によりて救濟せられ、吾等は茲に一切の苦惱を脱却することを得る也。

吾等は常に壯者なりとして自ら健在を誇るも、焉ぞ知らむ、吾等は老人のそれならむとは而も吾等は重荷を負ふてあへぎ。峻坂を上りゆく老人其まゝ也。吾等は常に百千限りなき煩惱の重荷を負ひつゝ、千山万岳の遮ぎるをも知らず平然として世を過す老人なり。生死の息は喘々として刻一刻に迫り来るも少しも之を覺知せざる也、盲人の斷橋を渡るか如しとは洵に吾等の事なるべし、危哉。

吾等は慾の人なり、眼前の榮利を見ては虎狼の心よりも猛しく他を井に陥しても自ら取らんとす、これ吾等の性慾なり、然れども吾等は自己反省の力極めて薄弱なるを以て、生死の大海上を超へて未未永遠の生命を悟ることを知らざる大慾なき吾等なり。永遠の望みなき吾等こそげに淺ましきものなれ。されどく、吾等は淺ましさものなればころ、佛の慈悲によりて救濟せらるゝ也。煩惱具足の吾等なればこそ、佛の光明によりて攝取せらるゝなり。親鸞上人は『善人ナヲモテ往

う  
はあるに従ひ、名譽あればあるに従ひ、權力あればあるに従  
ひ、死後を憂ひて煩悶するは雙棲生活の免れぬところであら  
されど臨終の一刹那の爲めに一生を犠牲に供じて、獨身生  
活を爲すは頗る愚かのやうにも考へらるゝ。而かも死は人生  
の最大要義たるを知らば、その一事のために他の凡ての者を  
犠牲に供するはまた止みがたき次第ではなからうか、  
若し夫れ一段の修養を積んで妻あればあるに任せ、子あれば  
あるに任せ、財寶と名譽と權力とあればあるに任せ、紛糾錯  
雜せる幾多周囲の事情も我が心に障へずして、從容死に就く  
を得るものこそ希有の最勝人であろう、

無限の罪惡

百目木智璉

世には我身の行を顧みずして却て人の悪あくを許かんするものあり。人の悪あくを許く或は可なりとせん。然れども退いて我日常爲し行ふ所を顧みなば、心中果して一點の疚ゆうしき所なきか。聞より聞に葬り去らむとする秘密ひみつはなきか。秘密ひみつてふ文字をきく毎に吾は吾心の奥底おくそこより何物が響きわたる心地して、小さき胸に鼓動こどうの波は岸打ししこつゝれの如く、層々そうそうとして寄

せては返し、胸中絶ゆまなく悶へ苦しみ、惱み煩ひて、人知  
れず暗涙に咽び後悔の贖を嗜むこと數々あれども、それもつ  
かの間に打ち忘れ、曇の心は消えやらず、煩惱の影は身に附  
き添うて人を嫉み、誹り、嘲りなどして、或る時は友を賣り  
または親に背き、いつしか名利の太山に迷ひて望むべからざ  
る攀鱗附翼の念を起し、高名手に唾して成るべしと思ひさや、  
一跌、再跌、失望落膽、悶瘻遺る瀬なく。遂に人を怨み世を  
はかなみ、果ては軌道を逸したる驛馬の如く全く放逸の人と  
なり了るなり。これ吾等の状態にあらずや。而して常に思へ  
らく社會はこれ罪惡の府なり、暗黒の夜なり。社會の半面に  
は詐偽行はれ、殺傷行はれ、掠奪行はるゝなり。更に翻へり  
て他の半面を見るに偽善の態度を裝ひて倫理を教うる教育家  
あり、救濟を説いて止まざる宗教家あるにあらずや。社會の  
木鐸となりて世を導く宗教家、教育家にして既に然り、況や、  
他の政權を事とする政治家、錙銖を争ふ實業家の輩に於てを  
や。憐むべし世を擧げて名に奔り利に耽けるの徒、宛として  
累々たる瘦狗の一齣の肉を争に異らざるを。げに社會は闇の  
夜なり。罪の塊なり此間に處して超然自ら潔うして將た何  
事をかなすべき。世は濁れり、吾獨りすめりとして以て幾干  
の貢献を社會に拂ふべきや、これ實に一個の疑問なり。この  
疑問、これやかて宗教の天地に入らんとする關門なり。茫々  
たるの曠野前途遙に一點の火影を認めんとするときは、正さ

生ヲトク、イハソヤ『惡人ヲヤ』との給ひしも、このことはりにあらずや。吾等は自己一切のはからひを打ち棄てゝ吾は媚きものなり、罪深きものなり、淺ましきものなりと、心中より深くも懺悔したらむには。絶体無限、智慧圓滿なる佛陀、などが吾等を見棄て給はんや、片時も吾等を救濟せずしておかるべきや。吾は吾心の中、一毫の私なく一片の曇りなくしていつも清らかなる時に於て、始めて一道の光明は奥の奥底より閃めき來らむ哉。

## 心絃共鳴

此篇は去月廿三日の日語講話の席上に於て披露したる者也

記 者 識  
我親愛なる求道學舍諸兄足下、諸兄よ、諸兄と御分れ申してより既に旬日意外の御無沙汰申しほ、申譯なし、イザヤ別後の消息申陳べむ、十二日の味爽東京を辭し滌車窓外の景色得も言はれぬ眺めなり、品川沖の曉霧に旭日昇りたる、程ヶ谷戸塚の秋景色の清らかなる、氣もすがくと心地よく觀する間に、前夜々を徹して原稿を書きたるためかツイ眠に落ちたり、フト醒むれば箱根一帯の紅葉飽く迄も濃く染め出だしたり、特に富士の峯青々として殆むど紫水晶の塊かと疑はる迄に奇麗なるが、新たに雪の冠を被りて藍の如く澄み切りたる高き空に聳へたる其美しさに瑞西の山も以太利亞の空も追及ふものにあらず、我未だ此の如き清らかなる富士を見

刻し之を求道學舍に集ひ玉ふ我が同信の兄弟姉妹の方々の精神上の養ひに供へむと思ふ、  
去る十六日の日曜には多數の方々御集ひの趣き百目木兄の御手紙にて、承知しほ、實に嬉しき事限りなし京を去りてより暫時なれども特に懷かしく感ずるは求道學舍の日曜日なり、明後廿三日の日曜日に定めし吾が信仰上の同朋兄弟の集ひ玉ふらん、其様子今より想像されてたのもしく思ふ事限りなし、今日は朝より細雨霏々として秋の日の寂しさ又一人に幽趣あり、昨夜來是非一文を物してと存せし處郵便時間に限りあり、只前後の消息を傳ふのみとして他は次の便に譲り、只左の物語を附記せむ、  
此中に封し込みたる書面は仙臺なる第二高等學校に於ける佛教の信仰を生命として組織されたる道交會の幹事鈴木卓苗君より來りしものなり、兩三日前に予が手に廻送せられたり、予は實に此書の眞面目なるを見て心中深く感動せり、諸兄よ此書は吾が同信の兄弟が佛陀の眞心を彼か兄弟に傳へたる活潑史なり、彼は其喜を同信の兄弟たる予に傳へ来るなり、是其書に示すが如く同じ信仰の間に於ける「秘密なき心」の披瀝なり、予は再三再四熟讀して欽慕措く處を知らず、多少人の秘密に渡るの恐れあるを以て他に示すを躊躇せしが遂に以爲らく嗚呼此の「秘密なき心」なる同信の諸兄姉に示す何かあらむと此に告げ参らする次第なり、冀くは諸兄姉よ心を潜めて之を読み之を聞き玉ふべし。

近角先生筆下  
十一月十五日今夜は我自炊案にては、いつもの如く相集りて談話會を開き申候、二十五人の兄弟中三名の不參者ありたる外は圓座をつくりて「秘密がない心の時」を語り合ひ申候、始めの程は秘密てふ文字の意味を制限すべし、人情豈に秘密ながらむやなご己の思はく書ふ者もありて、中々に出題者の心揃み難れたる様子見えしが、二三時間の後には愈々「大義親を滅する」の所、乃ち聖書に「地に平和を出さん爲めに我來れりと思ふ勿れ、我が來れるは平和を出さん爲めにあらずして刃を出さん爲めなり、され我來れるは人を其父に背かせ、女を其の母に背かせ、恵を其の姑に背かせんが爲めなり、一家分裂して互に敵対せん、我よりも父母を愛するものは我に於て見るに足らず、我よりも子女を愛するものは我に於て見るに足らざるなり」さある所に吾人の生命をかくれば、人世何事を秘し何事を密かにすべきぞといふに至りつき候うの時に及びて我兄弟の一人に起れる新事實を今夜先生の前に申上げむと思ひ侍るにて候、そは小生さ〇〇の君との間に起れることに候、この人については先生御下仙の砌に已に僧むべき罪惡の經歴を傳へられて、學友その他の人々より再三の注意を我等に與へられたるも有之しが、不思議にも今夜の談話會が、此人をして心より悔悟發奮するの機会を與へ申候、事甚だ冗漫に亘ること、存じ居り候へども一々申上げまつり候、小生自分の經驗を以て「秘密なき心」を披瀝さんが爲めに、座上の〇〇君に例を取り申候、こは聊が決心する所ありたる故に候、已に二週日以前校内風會主幹より〇〇君の操行上甚だ醜かならざる所あれば審議して其制戒を行はざるべからず、彼が道交會自炊案に入れるうの後の行爲如何との間に對して、小生は有りの儘の事實を以てし、なほ吾等は此一人の兄弟に對して改悛を促かさんとするこなれば、矯風會の制裁をまつに及ばずして、彼が悔悟の日を見るべき由告げ、更に一切の事を自らひき受けし際にも、自分には此一人の爲めに一も隠す心なく、彼主幹の前に披瀝し得たるこを兄弟の面前に申述べ申候、皆々小生の暴舉にあきれつらむ、言なくしてその儘別れ申候、小生はかゝる事を以て面陳し得たる大膽を自ら驚きびらも、彼なしで悔悟せしむるの時機到来せり、機逆すべからずさありて叫ぶが如きを感じながら第二寮の戸口を出で申候、月の光中天より池心に落ちて秋氣身に迫るか覺ぬ申候、時は早や十二時に迫り居り候、かの池の端をたゞりて草徑の細きを踏み無言にて第一寮の支闌に至りつき候時、われと我心をばげまし「これより宮城野まで

たることなかりき、滌車は疾く馳しれど或は東に或は西に常に窓前に屏顔を見る、いと快し、携ふる冊子を繙きつゝ午後名古屋に着しほ、我が親友梶井兄は既に停車場に待てり、支那忠本店に宿りぬ、一夜清談往を懷ひ、來を語り、信仰を披瀝し宿縁を慶ぶ、翌朝又滌車に上る、米原に到れば琵琶の湖水は蓮を漾へ竹生の島は笑を含みて我を迎ふるに似たり、長濱にて下車し腕車我村に到る、鎮守の森は遠く望むべく我家の松亦高く聳へたり、春來しとき蓬莱草の咲き亂れし野邊に野菊の匂ひ開ける亦一段の趣あり、田にある農夫道にある童厚く禮しほ、車は吾が門に着きぬ、兄よ!! 父母は健在なりき特に微病ありと聞きつる父は全く快くなりぬ、其父母の喜は譬ふるに物なかりき、團樂の快予は寧ろ筆を省きて諸兄の推崇に任し奉るべし、是實に十三日の夜の事なりき、  
予が東京を去るの時よき人の教を受け來りき、それは信仰の極意を知らんとするには親鸞聖人の嘆異鈔を拜見すべし、又信仰の上より平素の實行の鑑みとしては蓮如上人の御一代聞書を拜誦すべしとの教なりき、兄よ、予は實に此教の味の深長なるを感佩するものなり、兄よ、予は毎朝父母の膝下に待して此兩書を反覆熟讀する事を日課とせり、實に信仰の眞髓信仰の實現此二書に盡くせり、洵に是れ信仰の兩面にして嘆異鈔を繙く時は親鸞聖人の信仰が如何にも確かににして動きなき厳の大地の底より生え抜きたる如く、御一代聞書を繙く時は蓮如上人の信仰が如何にも濃かにして油の如き雨に諸の草木の笑めるが如し、一は凜乎として秋霜烈日の如く、一は溫乎として春風和煦の趣あり、予は必ず他日此兩書を一冊として翻

行ひむ」と申出づ、彼は快く諾し候、路々に一人の學友あり、あやまりて性懲の奴となり、放校せられたる者あらむに、君はこれに對して如何なる同情を有すべきかに問な起こし、ひたすら彼が罪惡に對する思想を聞かんとする申候、思ひきや、殆んど何等痛痒の思想をも有せずして夢の如く、日々を送り來れることか自白され候、又彼が性懲の奴となりて犯せる罪をあげられて是一も證立つる所なくして、彼が幼時の性質より、家庭の有様、學友の感化等が彼をして今日の墮落を見せしめたるものとの罪惡の過程を物語り候、今日となりても人び唯一の據り所たるべく「自我さへも彼には亡びたるものゝ如く、一も據りて頗る所なければ、日時に我思ふことをへど他の妨げとなることを恐れず、この善事をば身を代へても爲し遂げむと思ふのこゝろなきまゝ、撰みて取る事もなく、敗れざ悔ひ改むることあらず、言はゞ波に運ばるゝ小舟の如く、身心の位置なるべし、自狀致され申候、小生の身にとりては餘り意外なることに感ずてさるべき人の世にあるべしとも思設けざることと色々古質の逸話より學友の信仰心などを打語らひ、宮城野の野中の一つ森をまばり申候月の光り愈しき明かにして彼が心の益と過去の陰雲をやぶり、未來の望みを眺めけむ、數度打出でたる百葉をつまねば始め自炊寮に入り来る時には夢飯の香悪しきのみ鼻にひりて堪へざりしを今は一つ机に打向ひて食ひ語りつる限りなき面白さを感じること、又始めてこの學校に入り来れる時には、おのれなごて特待生になり得ざらむ」とまで思ひあせりつる心も、今となりては成績はよかれ悪しかれ、唯バスクへせんを望みとするに至れるのみか、時として落第も左迄耻しき事にあらずと思ふさへに至りつたるを思へば、人心の墮落の何處まで下りゆくとはかず、思へば罪深かりし我身の千恨萬悔をさも及ぼすて心から悔ひ改められ候、小牛里が程の野路もいつしき過ぎで、鐵道の上に來りし時には、早や向上的一路に光り見ぬけむ、おのれこの日この夜まさに自己の卑しき心卑しき身に思ひつきねれどここに生涯の一轉軸を畫して、明日より新しき望みを以ていうしまんと喜び勇みて打語られ、家の門をくぐりいり申候兄弟のイビキのみ聞に申候中に、彼は床をのべて眠りにつき候、あまりに感じたることなれば時の過ぐるをも打忘れ、認めて参らせ候、この後とては我等の彼に供すべきものとては、唯その「據り立つべきもの」にありと存ト申候

我人の望みこゝにつながり佛の御國現生すべき想像、かゝる夜こゝに深く感ぜら

## 日曜講話

毎日曜 本郷一時より番地一

## 求學道舍

郷里にて

明治卅五年十一月廿一日

近角常観

住家問題 (下) 講究

三 住家問題解決の方法

池山榮吉

◎住家問題の解決には、公の権力が立入るを要すべしか、將た私人の自由行動に委するを可とすべきかに就ては争がある。千八百六十五年、獨のニルンベルヒに開かれたる『國民經濟會議』では、住家問題は全く自然の成行に任して置きされば、需用供給の均衡に由つて、自から好い工合になるに違ひない、即住家が不足ならば、從て建て増されやらし過多ならば、茲に恐慌が起つて、再び好い加減に減ると、恰も暴風後空氣が清鮮になると異ならない、公権の干涉はこの健全なる自由の進路を塞くもので、寧ろ害あつて益なきものであるといふ意見が大多數を占めた、是は當時一般に行はれて居た自由的思潮の反映と見るべきであるが千八百七十二年に矢張獨のアイゼナハに開かれた所謂講壇社會主義者の會議 (是は主に大學教授連を中心とする會合で、爾來これから

れ申候

唯この事のみ申上げまつり候勿

十一月十五日夜三時十分

仙道台交會にて 鈴木卓苗

嗚呼宮城野の月影に今迄の罪を改め悔ひ玉ひける佛の御子よ、嗚呼如何に其心の清らかに在すらむ實に舊惡一時に消えて新しき生活は生れたり、又如何に親切なる佛の心を心とせらる教の友を持つことのたのもしさよ我は多くの言をかへまじ、只も其宮城野の月影は同じ教の友なる琵琶湖畔の我身を照して心の清らかさを感ずること限りなし、嗚呼此の眞實の懺悔をさく兄弟よ、此の至誠の友情を感ずる姉妹よ、此中に生ける佛の教訓に深く心に銘し賜ふべし、若し此懺悔と悔悟とをさして心中心苦しく感する人はなきか、心苦しく感ずるものは佛の哀みを求めて佛の御心に立坂るべし、抑々懺悔は内心の一大革命なり、信仰は精神の根本的改造なり、人よ我心を顧みて一點の黒き雲あらば早く其心を悔ひて佛の救ひを仰ぐべし、若し私かに犯せる罪の人にも打明け難きものありて包み隠して心の中に抱けるときは毒蛇を懷ろにして平氣を装ひ、ペチルスが内臓を腐蝕すれば其損害幾倍の大となり、其の悪を悔ゆること一瞬後るれば其病魔の蔓延すること水上に油を滴らし、薄き紙に火を點するが如し、此決して譬喻にあらず、看よ悪しき行となせる人は其の悪を蔽はんが爲め益々悪を働き、詐を言ふ人は其詐を隠さんために又詐を言ふにあらずや、一たび悪に染みたる人の自己の悪に氣附

くべからざる手段であるといふとに一致した。現今では先づ是が一般的の説であつて、各國の立法も大体此主義に據つてゐるものと見て太過はない。

▲住家問題解決の要義といへば、一面には住家の缺點及び不足を補ひ、他面には不健全なる投機を防遏する策を講ずる。而して他方の住民、殊に労働者をして、可成其の地方に留まつて、濫りに都市に集中せしめない様にし、以て餘りに急激なる都市の膨張を豫防するも亦一法であるが、是は隨分六つかしい注文で、下手をすると、其の方策は全く無効に歸するか、否らざれば、却てより大なる害を齎す虞がある。また賃貸借契約及び之より生ずる留置權に關する法律を以て、貸主の義務及び権限を詳細に規定し、貸主の專横に對して、借主の利益を保護するは、住家問題、殊に労働者住家問題と大關係を有するとして、最も有効なる手段の一たるを失はない。それから、市内及び其の附近の交通を便にして労働者が市を中心より稍々遠い地に住ても、太して不都合を感じない様にすることは、是亦大に肝要のとに屬するは讀者諸君の直ちに首肯せらるゝと思ふ。

◎住家問題解決の要義中、先づ不健全なる投機的賣買の防遏に關しては、種々方法はあるが、中に就き最も有効なのは租稅法の制裁で、此點に於て最も思ひ切つた規定を設けてゐ所は白耳義である。蓋し同國の法律に依ると、不動産の譲渡等では、家屋の階數の制限の如きにしても、市の中心より遠い所には餘り階數の多い家を建てるを禁じ、中央部に近ければ近い程度々と、より多いのを許す方針を探るやうになつた。

▲現存の住家に對する住居警察は、時々住家を検査して、或は居住者の過多なるを制止し、或は不都合の箇所の修繕を命じ、若し修繕若くは一部の小改造をして、到底改善の見込なきときは、其の家屋の閉鎖を命じて、改築せしむるので、一は以て借主の無順着を警しめ、一は以て家主の不注意を責め、其の義務の履行を督促するものである。倫敦などでは、單に一戸々々に就て斯る處分を行ふのみならず、時としては、不健康と認めたる町並の或る區域全体の家屋を取り拂つて、新たに建て直す(私費又は市費を以て)ことがある。千八百七十五年至九十年の間に於て、倫敦では、二十餘回といふもの

この大取拂を行つて、舊家屋の住民六万人許に對して、五万人許を新家屋に收容したといふことである。ハムブルーでも

數年前から、五万餘人の住んでる數區域の家屋の取拂改築に着手した。

◎住家不足の救濟策としては、先づ其の事業經營の主体から見ると、一私人的經營に係るものを除いて、大体(一)公益法人に依る建築事業、(二)共同組合に依る建築事業(三)營利的會社に依る建築事業、(四)僱主に依る建築事業、(五)國家及び地方團體に依る建築事業の五の方法がある。以下簡短に其の趣意を説明しやう。

▲公益的建築事業とは、營利の目的に出でずして、小住家の建設に依り、住居關係の改善を企圖する事業をいふので、其の組織は、或る社團又は財團の形式を探るものあり、或は株式又は合資會社の形式を探つて、配當を一定の歩合以下に限るものがある。而して家屋の取得に就ては、或は新に建設するものあり、或は現存の家屋を買收して用ゆるものもある。又其の家屋を單に賃貸するに止まるものと、分拂、其他信用の方法に依り、居住者に其の所有權を譲渡するものとする。

▲共同建築組合には二種あつて、一は、組合自からは建築に關係せずたゞ組合員が家屋を建て又は買ひ入る際、前貸を爲すに止まり、一は、組合自から建物の所有者となつて、組

には、八分乃至一割三分の登録税を賦課するとになつて居るので、この規定が直ちに賣り放つ目的を以て授受する投機的賣買の成立を困難にし、從て地價の暴騰を防止する効力あるは疑ふべからざる事實である。同國は歐洲中最も人口の多い地で、富の程度は極めて高いにも拘はらず、其の地價は獨逸のに比して、概して三分の一位にしか過ぎないといふのは、無論他にも原因はあるとあらうが、右の規定も亦與つて力あるものと見て差支ない。ドクトルアーチ・ケスは千九百年にフランクフルト市(獨)に開かれた「労働者住居獎勵會」に於てせる演説中、「固より此の如き禁退稅を課するとは、我國の事情に於て望むべきとてないが、八分乃至一割三分と、我が二分五厘の登録税との間には、幾多の斟酌すべき段階がある云々」といつたが、是は同じく我が國についても言へると、思ふ。

◎住家の缺點、即不便なる住居の關係は、獨り建築の工合に基くもののみならず、また或は使用の方法、殊に一つの家に住む人が多過ぎるに由るとがある。て、新に建築する住家の瑕疵を豫防するのは、建築警察の任であつて、現存の住家の瑕疵及び居住者の過多を防遏するには住居警察の司る所である。

▲建築警察は、建築の材料、階數、地坪と地坪の關係、防火壁、窓、天井の高さ、便所、下水等、總て衛生、防火、危

合員は定期に少額の出資を爲して、持分權を取得する仕組で、前者は主に英、米、白に、後者は主に獨逸に行はれて居る。

▲獨逸には公益的建築事業を目的とする株式會社は四十、合資會社は十四、社團が十八、財團が十六、合計百五の團体があつて、共同建築組合が二百八十九ある。而して此の團体及び組合が千八百九十八年迄に建設した住居の數は二万四千七十五で、内、一万三千七百二是團体の、一万三百七十七は組合の建設に係るものである。

▲營利的建築會社も、小住家を建設して暴利を貪らざる限度に於て、或は賃貸し或は分拂の方法を以て居住者に譲渡すことゝすれば、是亦住家問題の急に應ずる上に於て、一良法たるを失はない。千八百九一年に柏林に設けられた『國民建築會社』は、其の建設せる住家の居住者を生命保険に附せしめ、居住者が六十歳となり、又は其前に死亡したる時は、其の住家は居住者又は其の相続人の有に歸せしむる制を定めたまた、白耳義では、千八百八十九年の法律を以て、貯蓄銀行は家屋取得者の生命保険を引當にして家屋の建設又は買入に要する資金を貸出すとを得る旨を規定した。斯く生命保険の制を家屋取得の方法に利用する事が廣く行はれるやうになつたならば、營利的建築會社も、住家問題解決の上に大なる効用を現はすとゝなるであらぶ。

▲「労働者の利益は僕主の利益である」。僕主が労働者の住

てやり過ぎる様なとがあつて、夫の公益的及び共同的建築事業と無用の競争を惹起するに至るであらふといふのである。とはいへ這種の事業はまだ近く數年來、倫敦、グラスゴー（英）、ライフルヒ（獨）等の數市が着手したに過ぎないのと、果して右様の弊に陥るや否や、未だ確たる實驗上の證明がないからよくは譯らないが、兎に角、國家及び地方團体で經營するに就ては、公益的及び共同的團体と略々受持の範圍を分擔する積で、假りに労働者の收入が上中下の三段に分れるとすれば公益的及び共同的團体は先づ上中の分を、國家及び地方團体は下の分を引受けといふ様にすることが肝腎であらふと考へる。

▲以上は住家問題の大体の筋道を説明したので、尙他に論すべき點も多々あり、且は二三の實例をも御話したいから、更に他日を期して缺を補ふとして、今はたゞ、英獨佛白の諸國では、或は労働者家屋の租税を減免し、或はまた労働者家屋の設備に必要な資金を貸與するに付て特別の便法を設くる等、種々民間の建築事業を奨励する方針を探つて居るどを一言して置くとしやう。

#### 四 結 論

○住家問題は、現代の國家には早晚必ず起るべき問題である。我が國も亦獨りこの運命を免がれることが出來ないで、既に業に該問題の渦中に投じつゝあるとは争ふべからざる事

家を設備するのは、労働者を其の工場の附近に引寄せて、熟練せる労力を集中する好手段である。斯ういふ理由からして、僕主の建築事業は、國に依ては随分盛んに行はれて居る所がある。例へば獨逸で、千八百九十八年の調に依ると、工業家の設置に係る労働者の住居は十四萬三千四十九とある。併し其の大部分は地方に存在して居るのであるから、都市に於ける住家問題とは間接の關係を有するに過ぎない。這種の事業では住家と居住者の關係は單に賃貸するに止まるものが一番多いが、居住者をして所有權を取得せしむるものもある。國家又は地方團体が、其の鐵山、鐵道等の事業に從事する労働者又は下級吏員の爲めに、設置する住家も、亦理論上僕主の建築事業に算入すべきもので、是には非常に大仕掛の經營のあるとは（例へば國有鐵山に於て）固より其の所である。

▲國家及び地方團体が、僕主としてなく、一般の労働者の住家を建設し、拂下げ若くは賃貸するに付ては大分非難がある。それは第一、其の家屋の代價若くは、借賃を時の相場に合はして旨く權衡を探つて行くといふとがなかく六かいとなので、若しそれが高ければ何にもならず、うかといつて、餘り安過ぎる様なとがあると。居住者に不當の恩恵を施す譯になつて、却て爲めにならないのみならず、一般的の労働建築の健全なる發達を妨げる事になる。次に、國家、地方團体で這般の事業をやるとすると、勤もすれば、必要を超じ

實であるにも拘はらず、未だ之に對する救濟方法として見るべきものゝ甚だ鮮きは怪訝、否、寧ろ寒心に堪へざる現象といはざるを得ない。博士シモーラーは嘗て住家問題を論じて、「吾人は成るべく下級社會をして、好良なる住居の價値をしらせる様に努めなければならぬ、彼等をして、好良なる住居を棄つるは、一杯の麥酒、一回の日曜の遊びを廢するよりも、より危険なるを悟らせる様にしなければならぬ。之と同時に上級社會は、住家問題の爲めには、縱し尠からざる犠牲を供するとも、开は流行病に對し、社會的革命に對し、自家を保護する低廉の保険料と心得べきで、夫の流行病や、革命やは、吾人が下級社會をして、野蠻人、獸的生存の境涯に沈淪せしめ、棄てゝ顧みざるときは、必ず起らざるを得ないのである」と言つた。蓋し大に聞くべきの言である。

▲抑も住家問題の解決には、上に列舉せる諸種の方法は何れもこれも皆必要で、相互に提携し共力して、他の手の届かない所を補つて行くべきものであるが、我が國現下の状況に照して、比較的最も出来さうで、且つ最も望ましい所のものは、公益的建築事業であると思ふ。固より此の事業を起すには、随分多額の資金を要する次第であるが、併しそれで建てた家屋は無償で貸すのではないから、當初の設計が餘り無暗でない限りは、其の資金は決して損失に歸する氣遣ひはないばかりでない、必ず多少の利子を生み出すことは請合で、而も其

事業は大に公益となるといふ一舉兩得の結果を生ずるのである。が、万々一縦し多少の損失を招くことありとするも、是に由て、一方には下級社會の衛生、經濟、道德を保護し、他の方には社會の危害を未發に防ぐことを得るとすれば、其の得失は言ふ迄もないが、利害の勘定は暫く措いて、進んで人道的宗教的見地より、奮つて該事業に着手するもののがある。又更に妙で、是に増すことはないものである。

## 信 索

## 佛弟子小傳 (十)

近角常觀

尊者滿願子

尊者滿願子とは富樓那彌多羅尼子のことである、正しく云へば、補賴擎梅怛利曳尼弗怛羅(Brahmajambhūvadharo)即ち滿慈子と名くる人である、此人は天性聰明にして思想頗る緻密であつた、加ふるに宗教的修養に於ても非常に超脱して居た故に、他を教化するに癖を搔くの想があつた、佛弟子中に於て說法第一と稱する人である、俗に富樓那の辯と云ふことであるが、單に辯舌に長じて居つたのみではなく、求道者の正さに要求しつゝある點を能く鑒知して之を開発することに長じて居たのである、殊に傳道的熱誠の熾んなると、殉教的精神性の凄じきとを考へてみれば、一言一句人の臓腑に浸み涉つたも決して偶然ではない。

至りしや否やを觀察した、豈圖らむや、世尊は得道してベナレス鹿野苑に於て法輪を轉せられつゝあつた、富樓那胸も裂けんばかりに大に歎び、踊躍して、朋友に告げて曰汝等今我と共に彼の世尊の邊に至り、佛の邊に詣て佛の足を頂禮し、兩手を以てて曰く仁の語、善し、我等從はむと、直ちに飛ぶが如く、ベナレスに至り、佛の邊に詣て佛の足を頂禮し、兩手を以て世尊の足を執りて摩娑して頂戴し、頭を擧げて、口を以て如來の足に接し、起て佛の前に跪き、聲を擧げて出家を乞ひ求めめて曰く唯願くは世尊、我等を哀愍せよ、我等心に願して、出家を得むと欲す、慈悲を以て矜み、我等を度脱せしめ玉へと佛告げ玉はく、汝富樓那よ今速かに起つ可し、汝の意に隨ふべし、我、汝等と與に心の願ふ所に從はむと乃ち富樓那已下三十人具足戒を受けた、此人々は既に久しう苦行を行はした位の人故、戒律を守り修行すること頗る嚴格であつた、各々心を用ひ、獨り臥し、獨り行き、獨り坐し、獨り立ち、勇猛精進にして空閑處に住し、正心、正信にして、梵行を修し、阿羅漢と爲り、心を以て善く一切解脫を得た、此の如くなるものは即ち此富樓那彌多羅尼子是なりと、殆ど是れ、耶輸陀及び四人の朋友五十人の商人かベナレスに於て道を得た後であつた、夫故此時世間に合して九十一人の阿羅漢が出來た。

富樓那が說法に巧みにして人を感化した事例は少くない、

彼が傳道に於てかく伎倆を有して居つたのは斯教に忠實にして、之か爲めに殉する覺悟は千古人の心を動かすものがあつたからである。一時、佛摩鳩羅無種山中に遊び、王ひたる時佛に白して曰く、善きかな世尊、我か爲めに要法を講じ玉へ、我當さに奉行すべし、身をして長夜安穩にして極りなからしめ玉へと佛言はく諸かに聽け富樓那よ、人は皆目に好色を見、耳に好聲を貪り、鼻に好香を識り、舌に美味を知り、身に細滑を著、意其欲する所を愛し、貪り求むる所を慕ふ、若し比丘欣然として心其中に處するときは迷ひ惑ひて是より憂惱の感を生す、富樓那よ若し比丘、目に色を見るも其見たる物を觀樂せず、心其中に處せざるとときは惱患除く、耳鼻口身意亦復此の如し、粗、要法を擧く、佛教誨して汝を誠勅し、道を傳ふるために、汝を遊はしめむと欲すと富樓那佛に白さく、唯然り、世尊よ一國あり、首那和蘭(所聞欲勝)と名く、彼國に遊はんと欲すと、佛言く、彼國凶惡にして志荒々しく、柔和ならしむる能はず、臺むで人と鬭乱す、若し彼國人汝を罵言ふ辱しむるも我心は忿ふべし、彼、我を愛し、我を敬す、尙我手を赦し、拳を以て我に加へずと佛言く若し拳を以て汝に加へは奈何すべし富樓那白さく我心に忿ふべし、彼尙我を愛し、我を敬し、賢善柔軟なり、瓦石を以て我を打擲せすと佛言く若し瓦石を以て汝を打擲せば奈何すべき富樓那白さく彼國人、仁和溫雅なり尙刀杖を以て我身を傷撃せすと佛言く若し刀杖を以て汝か身を傷撃せば奈何すべき富樓那白さく我忿ふべし彼善く柔軟温雅にして利刀を以て我身命を害せずと佛言ふ

カピラヴァストゥを去る遠からざる村に、一婆羅門ありて、淨飯王の國師となつて居た、其家頗る富みて其居宅も亦盛んであつた、其婆羅門の一子が富樓那である、彼は容貌が端正にして幼少の時より衆人の爲めに樂はしく観られた、彼は一切の章陀を暗誦して、自らも能く了解し、復能く之を他にも教へた、又三種の章陀を具さに解し、五明の論に精通し、世辯に於ては六十種の辯論術に長じて居つた、彼は淨飯王の宮殿に於て悉達太子が降誕せられたる同日に生れた、此人性來沈痛にして世上の喧躁を厭ひ、解脱を求め、涅槃に志した、富樓那一日、獨坐思惟すらく、我か父は既に淨飯王の國師となりて、經營盡力し、萬般の、事件に參與して、王法の中に處し、王に代りて事を断じつゝある、而して王の兒、悉達太子は後年父王の如く王位に上り、猶進みて必ず轉輪聖王とならるゝこと疑ない、して我父若し無くなりたる後は、我が代りて彼の悉達轉輪聖王の國師とならなければならぬ、我父は既に小王の國師となりてすら、此の如く暫くも闇がない、況んや轉輪聖王の大國師となりたる時は事務鞅掌にして寸暇も無からう分別するならば今である我今何事をか爲し、又如何なる計をなしたらばよからう、可し、我今唯一家を捨て出家するある耳と考へた富樓那かく念ひきめて、恰も悉達太子出家の夜に當りて夜半默然として父母に詣らず、其友人二十九人と共に家を出て、遙かに波黎波遮迦法の中に至り、出家を乞ひ、雪山に居て、苦行して道を求めた、彼等勇猛精神にて暫くも休まず、三十人一時に成就して、四禪五通を獲得した、時に富樓那、悉達太子が聖王の位を受くるの時節の

く若し利刀を以て汝か身命を害せば奈何すべき、富樓那曰く  
我當さに心に念ふべし、身六情の爲めに患害せられ、不淨の  
流れ出づるを厭ひ、刀を求めて食となさんと欲し、唯之を味  
はんことを志せり、彼今之を我に與ふ我寂然として之を享く  
べしと實に潔き覺悟である將來外國傳道には此決心かなくて  
はならぬ、佛言く善きかな富樓那よ汝能く任に堪へたり、汝  
かく比像、調順、寂然、忍辱、仁賢の諸徳を行ひ、彼の國に  
に處し、意の欲する所に隨へと、そこで富樓那座より起ち、  
佛の足に稽首し、三たび右に繞りて敬意を表した、其夜は自  
分の室に歸りて安眠し、早晨衣鉢を着して彼の國に往きた、  
一夏中に於て教化の效果頗る著しく、安心を得たるもの清ら  
かなる信士凡そ五百人、清らかなる信女五百人に上つた、又  
寺舎を興すと五百、窟室床榻五百、法坐具、被枕各々五百個  
あつた而して又五百人は出家して沙門となつた實に是れ傳道  
者の好摸範である、現代佛教の振はざる所以のものは、確かに  
于此の如き森嚴なる殉教的熱誠か缺乏して居るからである、  
吾人は當年を追憶して、秋霜烈日、一種言ふべからざる靈氣  
を感じる次第である。

▲前號信界報正誤▼

○二十五頁上欄、「朱茶半託迦(Cuddhipamthaaka」の誤植  
○二十六頁上欄十行已下、「大路は其門人の人が勤むるまゝ出家し  
て、試みに一比丘に就きて佛の道を聞きたるに、比丘は彼に向て先づ  
ナ善士惡の因果應報を說いた」に作るべし

## 報道 束

◎ナ起窓を推せば曉の霜白くして殘月光りなく、冬の空は何となう物凄く候。  
◎流行と云ふものは妙なものにて候、過般集鷗なる卍宗大學に紛擾相起りしこ  
そば、讀者諸君の既に知らるゝ所なるが。此の間は高輪なる佛教中學にも紛擾相  
生じ校長排斥とやらにて、生徒一同同監体校致候なかゝ元氣の者に候。宗教々  
育も隨分困難なるものと相見候。  
◎施賜人ありて寄に之を賣りて二十五金を得内心大に喜び居り候處、遂に刑事  
巡査の檻にかいり候山新聞紙上にて散見致候。自施自縛とは眞に此等の事を指し  
たるものならん、めくる因果ほき恐しきものは無之候。  
◎京都なる興正寺派本山は此頃祝融の災にかかり、全焼致候由惜むべき事に  
候。

◎日出新聞はモルモン宗の機關に相成候との聲に候。

◎南條博士には本月二十日香港に安着致候との通知有之候尙同博士より『南征  
の日記』郵送せられ候得共、既に餘白なきを以て次第に掲げて御披露可致候。  
◎教界の時事問題は大谷派財政問題と覺王殿建設に就ての紛擾にて、霜枯の此  
頃は益々景氣を添へ居候。  
◎概して佛教界は自覺しさ事務も無之候これに引き換へ基督教徒は不言の裡若  
々として社會的方面に向て力を發ぎ居候様に見受けられ候。

◎前代議士の入水沙汰あり、神戸には犬養事件あり、世は様々に候。

◎萬國基督教會は來年日本に於て開かるゝとの事に候。又しても教組の擴張に

候や。

◎伊藤侯伊勢神廟に謁しての途上の即命なりとて

忘已奉公推至誠。盡思覩處質神明。匪躬器々王臣節。霜氣擴天將酒醞。

結句のみは實景なりこの世誇に候。

◎求道學金の日曜講話は大抵六十名餘にて比較的婦人の聽講多く候。其後の演

題と出席者は

從心想生(十一月十六日)

愛の宗教、悟の宗教(全上)

佛道の味(十一月二十三日)

至大の要求及其充實者(全上)

齋藤 唯信

齋藤 龍造

前田 慧雲

前田 邦

新刊紹介は餘白なきを以て次巻に譲る

◎信仰の餘瀝

齋藤 唯信

齋藤 龍造

前田 慧雲

前田 邦